

# 大阪教育大学WWL・拠点校の取組みと成果

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

主幹教諭（WWL推進委員長） 松田 雅彦

大阪教育大学教育イノベーションデザインセンター

教授 仲矢 史雄



## 【2】探究学習の高度化、自律化

[1] 大学教員等による研修・指導支援 ⇒ 高校全教員が指導できる体制と指導法（平野メソッド）開発

⇒ 全教員が共通の方法で指導。毎年指導法を改善

課題研究ツール『平野メソッド』 | 大阪教育大学附属高等学校平野校舎  
: 大阪教育大学附属高等学校平野校舎 ([osaka-kyoiku.ac.jp](http://osaka-kyoiku.ac.jp))

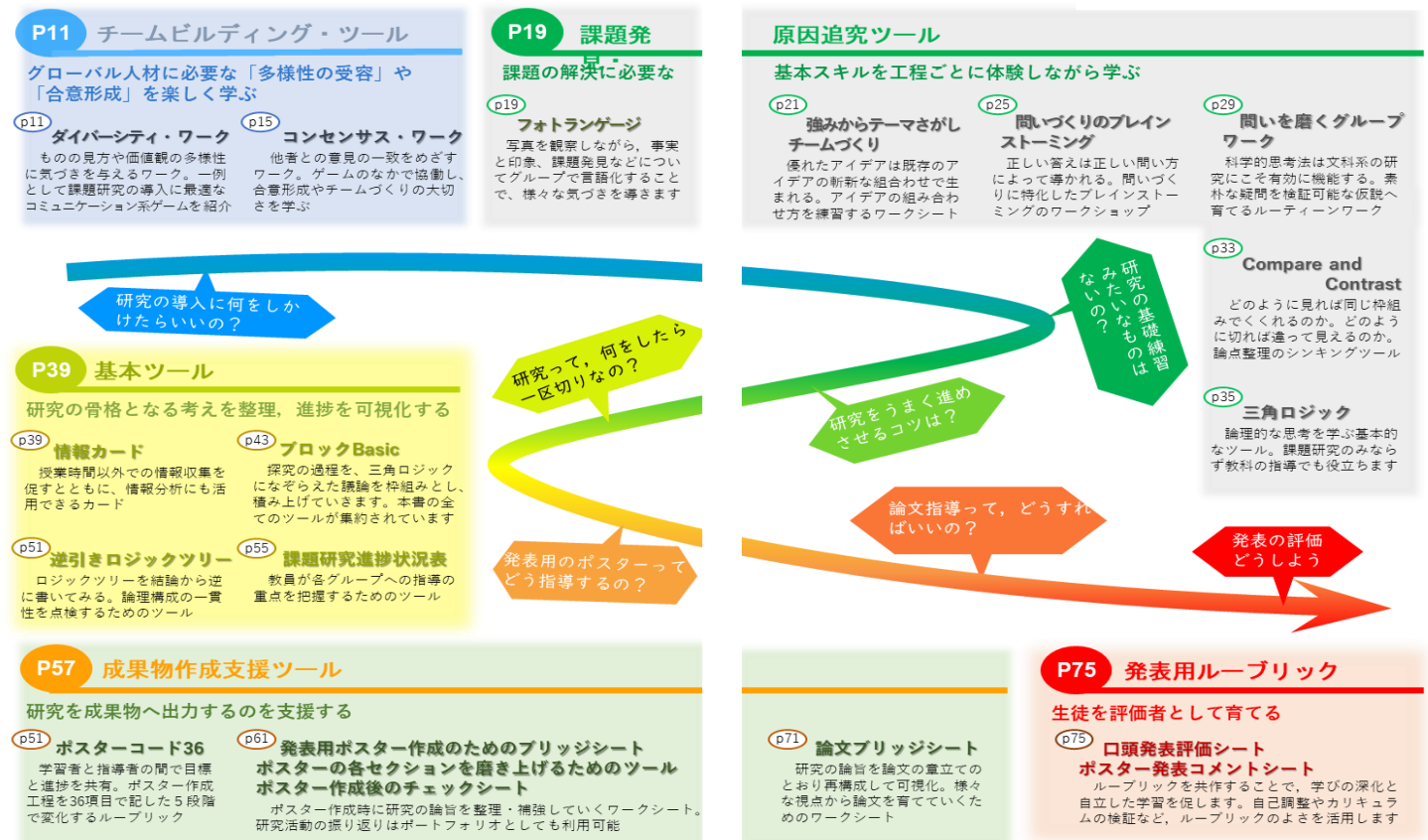
[2] 全員参加の海外研修と課題研究（グローバル探究）の関連付け強化 ⇒ 教員も数年間で全員が付添

⇒ 実体験に基づく課題研究でモチベーション高揚（コロナ時は留学生による指導が有効）

**1年「グローバル探究Ⅰ」**  
さまざまな学習ツールを使いながら探究の過程と研究手法を学ぶ  
\* 海外研修、国内フィールドワーク

**2年「グローバル探究Ⅱ」**  
グローバル探究Ⅰを踏まえ、グループで自主的に探究を進める  
\* 大阪教育大学、大阪大学等の留学生との意見交換・指導  
\* 海外研修、国内フィールドワーク

**3年「グローバル探究Ⅲ」**  
自身の研究のまとめ・振り返り大学での研究・将来への展望



# WWL推進体制づくり

- 学年団による体制づくり
- 平野メソッドやWWLカレンダーの作成
- 各学年がアレンジしたツールの引き継ぎ
- WWL課題研究（グローバル探究）担当の校務分掌化（22名中4名を担当者に）
- 希望生徒による探究+（プラス）の活動（放課後活動）

## 【3】学校への波及効果

### 〔A〕通常授業への影響

(1) SGH 2年目(2016年)より、教員対象「課題研究研修会」を開催。全国の先生方と意見交換

\* 学校設定教科を中心に**課題研究と教科を連携**してきた

「三角ロジック ⇔ 生命の倫理」 「KJ法・ロジックツリー ⇔ 保健体育」

(2) WWL 1年目(2020年)より、**全教科の授業における「探究」を導入**、充実化を図る

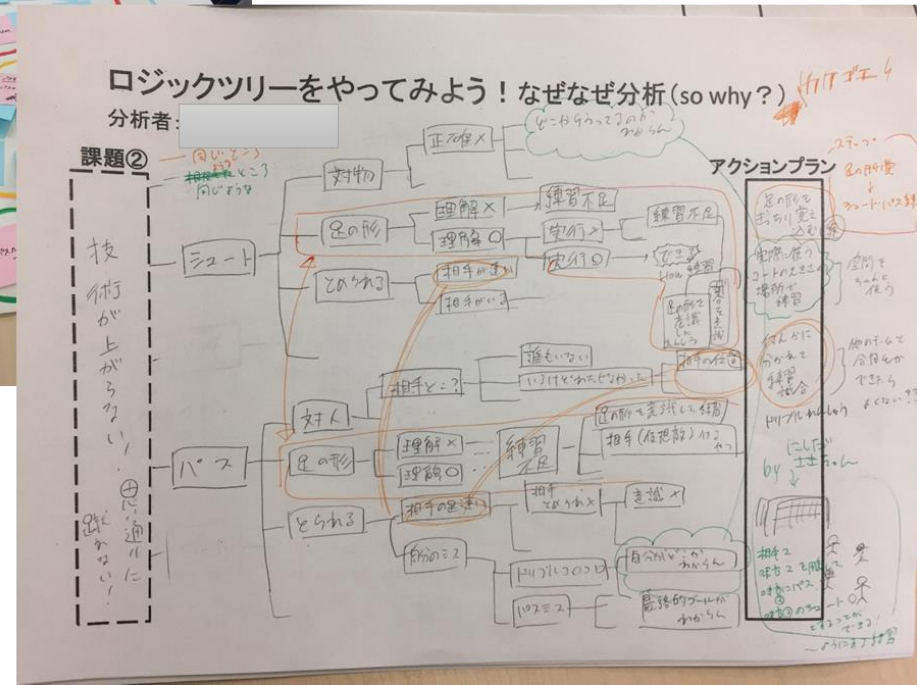
\* 2021年度11月 「地歴公民」「保健体育」が研究発表

\* 2022年度11月 「国語」「英語」が公開授業と研究発表  
教員対象「課題研究研修会」で「教科における探究」について意見交換

\* 2023年度11月 「数学」「理科」が公開授業を実施予定

# 課題解決学習としての体育の学習 - 指導 (H29~)

	ねらい1	ねらい2	ねらい3	ねらい4
単元のねらいと流れ	今の力量にみあったルールやゲームの仕方に慣れながら総当たり制でサッカーのゲームを楽しむ	チームや個人の課題を整理するとともに課題解決の方法を導き出す	チームの課題分析結果を活かしながらサッカーのゲームを楽しむ (対抗戦) 【反転学習を導入した授業】	高まった力にふさわしいルールで、相手にあわせて作戦を立てながら総当たり制でサッカーのゲームを楽しむ 【反転学習を導入した授業】
ゲーム形式	11対11 (5対5(1/2コート) 総当たり戦)	教室での学習	8人チームの6対6 (1/2コート)の対抗戦	8人チームの6対6 (1/2コート)の総当たり戦
一時間の学習活動の実際	自分たちの力量を見極めながらゲームを楽しむ 「ねらい1」での授業の流れ ボールの止め方・蹴り方 1対1のボールキープ 浮き球のコントロール ボールタッチ シュート フェイント ゲーム	自己分析と問題解決 KJ法とロジックツリーを活用した学習 KJ法による問題抽出と課題整理 ロジックツリーによる課題解決のまとめ 課題解決方法の導出 戦術の説明 教室におけるグループワーク	自チームを分析し、作戦を立ててゲームを楽しむ 授業後、次の授業までの学習内容 (反転学習内容) 自チームのゲームビデオをチームに配布 ゲーム分析・課題整理・練習内容の導きだし 次時までに分析結果と練習内容をチームノートにまとめる チームミーティング 練習 試合 まとめ ゲーム分析	相手チームを分析して作戦を立て、練習を工夫してゲームを楽しむ 授業後、次の授業までの学習内容 (反転学習内容) 相手チームのビデオを対戦チームに配布 ゲーム分析・課題整理・練習内容の導き 次時までに分析結果と練習内容をチームノート 授業開始から次の授業までの学習の流れ



# 課題解決学習としての地歴公民の学習 - 指導

## 請願（陳情）書の作成をしてみよう

【学校改善のための請願を行おう】 … 地方自治の精神を学校自治に当てはめよう

○授業進行に関して…

目標：学校の改善点を洗い出し、その改善のために請願書を作成し、学校の生徒自治の活性化を図ろう

流れ： スタート

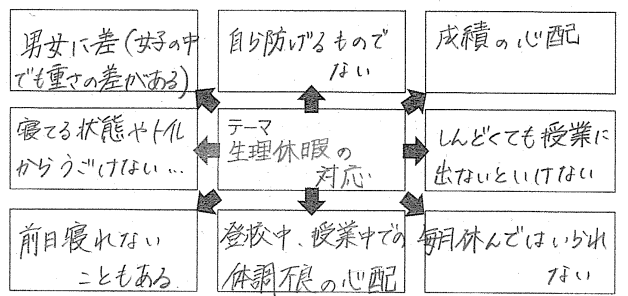
- 1 “マンガラート”を使用して、自分が考える学校課題を書きだす  
1回目：学校の課題から広げる 2回目：1つの問から焦点化
- 2 課題に対する“ロジックツリー”を作成させ、解決方法を見出す  
(隣の生徒とペアになり、現状確認を互い行う)
- 3 前時の課題（ロジックツリー）に対する“論理ピラミッド”を作成させ、説得力のある文章を練る
- 4 “論理ピラミッド”に基づき“請願書”を作成  
⇒ 字数は、360字以上とする

ゴール

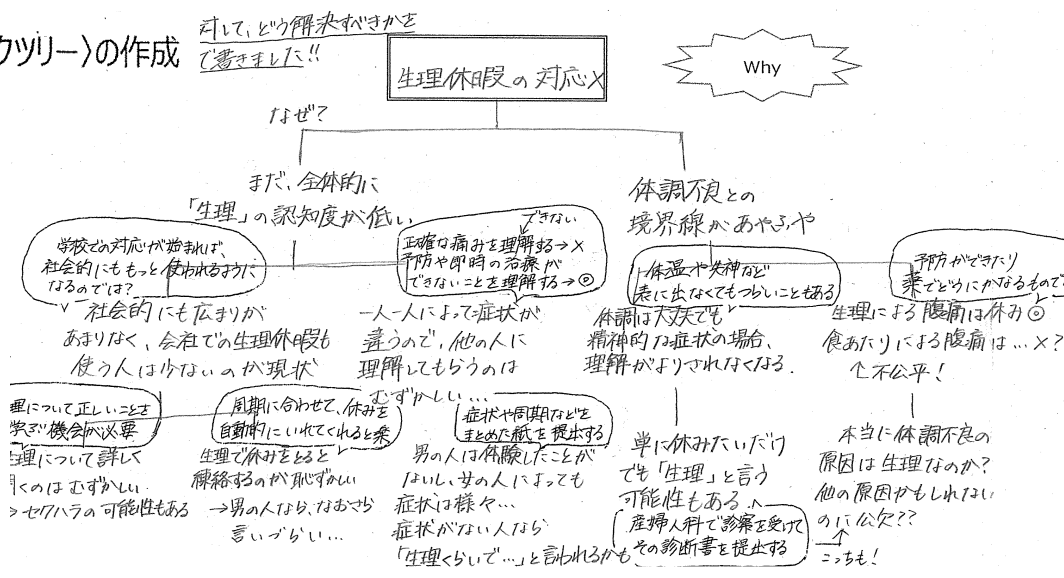
⇒ クラスの代議員を通じて、審議会で審議してもらい、必要な施策は生徒会の承認へ…

Chrome book での調査は OKとする

### ◎STEP1 (マンガラート)の作成



### ◎STEP2 (ロジックツリー)の作成



### ◎STEP3 <論理ピラミッド>の作成

- ②.根拠・理由 (ここが重要 説得力を増す部分)
- 男女格差、症状の重さによる格差がなくなる。(女性だけ毎月休む ⇒ 権威等で不利)
  - 学校で導入されることで、関心が高まり、社会的に主流となる。
  - しんどい時に無理して学校へ来たり、時には体育の授業を受けることさえある生徒の助けになる。
- 通学中の急な腹痛に対する不安を学習した、山田いづり、かりかほり、すずこが

### 自己評価

指標項目①	…	継続して取り組む力	
4	3	2	1
請願書の作成に対し、学校の課題をみつけ、必要に応じて方向性を修正しながら、発展的に取り組み続けることができる	請願書の作成に対し、学校の課題をみつけ、必要に応じて方向性を修正しながら、取り組むことができる	請願書の作成に対し、学校の課題をみつけて、取り組むことができる	請願書の作成に取り組むことができる

指標項目②	…	よりよい社会の実現のために貢献しようとする力	
4	3	2	1
学校の課題を理解し、その問題の背景を考えながら、解決に取り組む、周囲への影響を考慮、行動にうつすことができる	学校の課題を理解し、その問題の背景を考えながら、解決に取り組む、周囲への影響を考慮することができる	学校の課題を理解し、その問題の背景を考えながら、解決に取り組むことができる	学校の課題を理解し、解決に取り組むことができる

# 日本とカンボジアの授業交流

令和5年1月6日

シエムリアップのバイヨン中高校で本校の教員が化学の実験を実施



令和5年2月6日

バイヨン中高校の教員が化学の実験を実施





## 【3】学校への波及効果

### 〔B〕生徒の変化

#### <定性分析>

「グローバルな社会課題の課題研究」「海外研修」などを通して、社会課題への「明確な課題意識」をもつ生徒、自らの取組みを積極的に語る生徒が増加

- ・自らの「明確な課題意識」に関する研究ができる大学を選択（大学での研究や進路に反映）
- ・総合型選抜入試による進学者が増加

#### <定量分析>

生徒の変容を、大阪教育大学アセスメントグループと協働して分析 <後述>

## 【4】国内外の学校・企業等との連携

### (1) 大学や産業界と連携した授業「イノベティブシンキング」

[生徒] AI、ドキュメンタリー制作など、産業界のイノベティブな取り組みを体験・理解

[教員] 新しい価値や、文理融合の観点を学ばせる授業づくりを学ぶ

<授業例> 大阪公立大学・ヤフー(株)「SDGsをテーマとしたドキュメンタリー制作授業」

大阪教育大学・産業技術研究所「言語分析とAIの活用」、(株)MIRAIing「食品ロスを解決するアプリ事業の提案」

### (2) 英語運用力向上をめざした授業「即興型英語ディベート」

[生徒] 各生徒の評価結果を分析、英語運用力が伸長。情報活用力・批判的思考力等も育成

[教員] 指導法を学ぶ一方、通常授業で見られない生徒の資質能力を発見

### (3) 留学生による課題研究の指導 大阪教育大学 教員留学生、大阪大学 修士・博士課程留学生

[生徒] 海外の実情も踏まえながらの指導により、生徒の研究が高度化

### (4) 高校生国際会議 国内外11校、約600人が参加（一部オンライン） 大阪教育大学の学生・教員も運営協力

[生徒] 連携校の高校生とともに各プログラムを企画・運営。意見調整や協働力も育成

[教員] 各校の取組みに関する情報交換

## 【5】来年度以降の予定、WWL事業に関する課題

### (1) 来年度以降の予定

- 1年延長（自走） 有効な取組みを強化するなどメリハリをつけた展開  
（有効性や実施可能性、教員負担なども考慮）
- カリキュラム研究・評価 大阪教育大学の支援  
生徒の変容を複数のデータから分析、卒業生の調査
- 生徒の指導 大阪教育大学や協働大学等に依頼
- 資金 大学からの支援、企業からの支援、クラウドファンディング
- 近畿圏での連携校の拡大 取組みについての理解促進、広報。協働大学の維持・拡大  
（来年度前半に成果報告会を予定。近畿圏を中心に関心ある高校に参加を募る）

### (2) 課題

- 国内外の連携校との協働体制のさらなる構築

# 【3】 学校への波及効果

## 【B】 生徒の変化（定量）

### 人材育成指標の潮流

2002以降 コンピテンシー育成改革

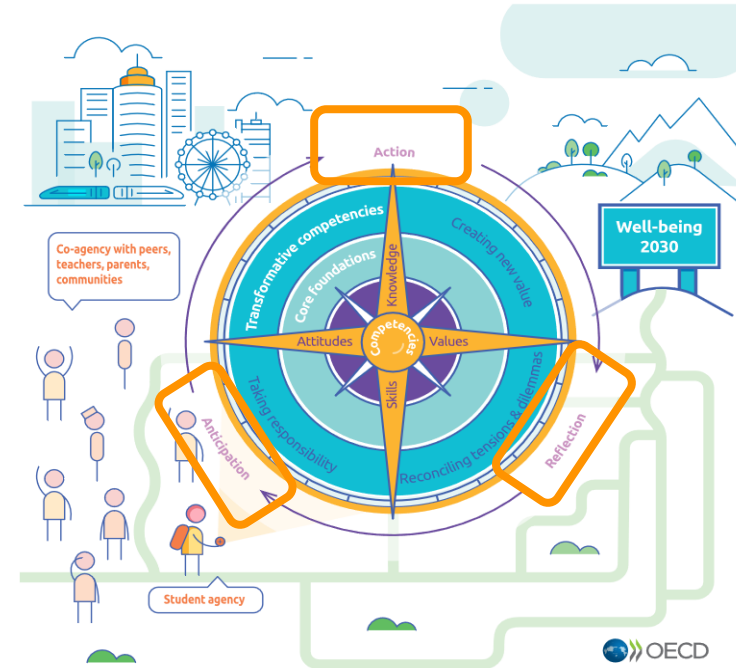
- (DeCeCo PISA型学力「キーコンピテンシー、リテラシー育成」) ⇒ **既存尺度(PROG)**

2020 社会的Well-Being 実現への改革

- (ラーニングコンパス2030、エージェンシー育成「AARサイクル」) ⇒ 尺度は未開発



新たな尺度（AARサイクル尺度）を開発⇒調査実践



- ✓ ANTICIPATION(アンティシペーション)とは  
“不確実な状況で実行するための予測”
- ✓ ACTION(アクション)は“経験につながる行動”
- ✓ REFLECTION(リフレクション)とは  
“次の活動のための振り返り”
- ✓ AARとは、Anticipation→Action→Reflection→  
の頭文字

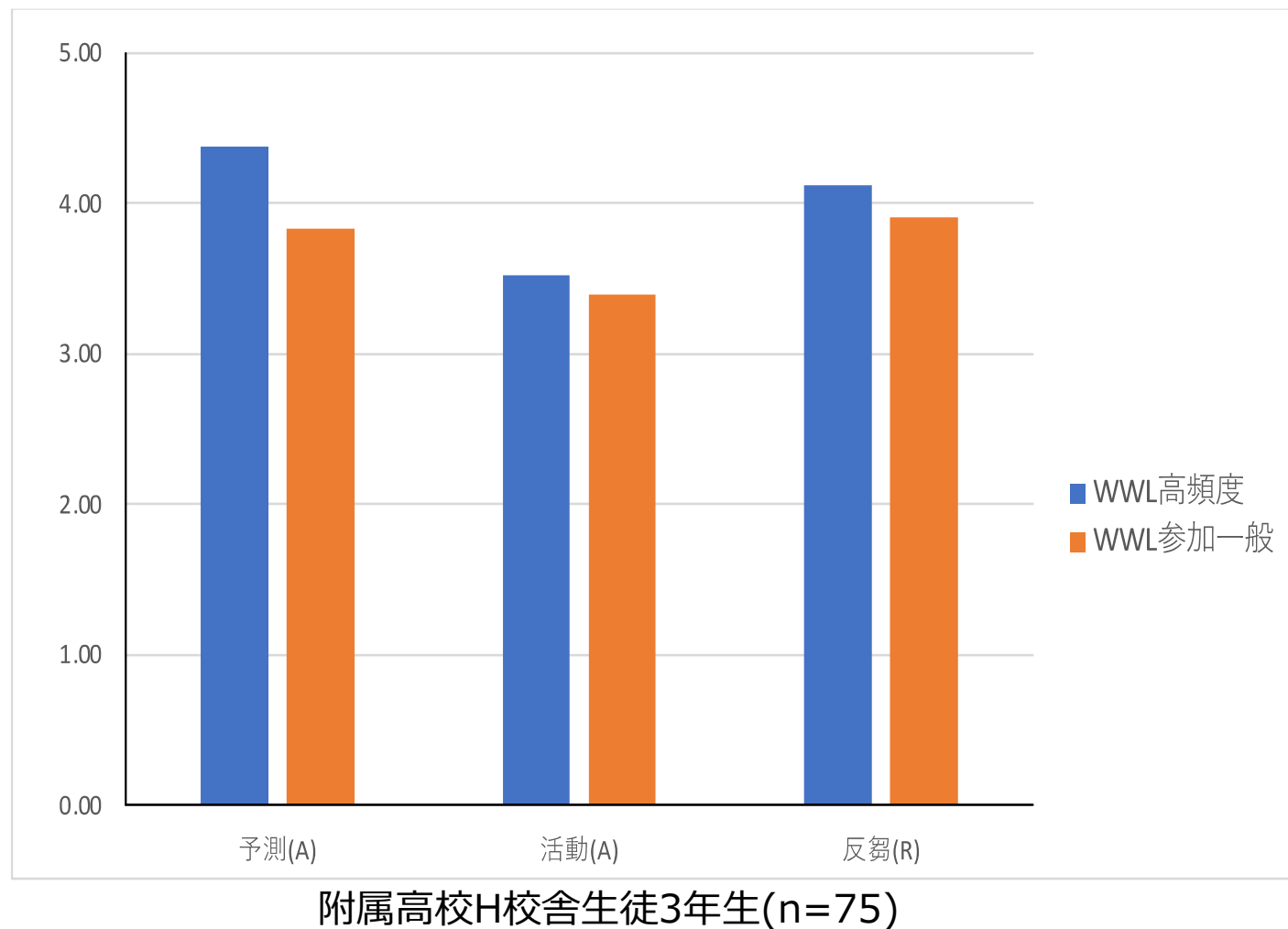
# AARサイクル尺度質問項目（確認的因子分析）

因子	質問項目
F1 : ANTICIPATION(予測)	新しいことを始めてみたり、学んだりするときに必要になることを予想することができる
	新しいことを学ぶときに、自分にとってどんないいことがあるのか考えることができる
	自分が行ったことが、周りの人や物事にどんな影響があるのかについて予想することができる
F2 : ACTION1(行動)	ひとまずやってみることが大事だと思う
	あまり行動力がないほうだと思う（反転項目）
	何事も恐れず行動することができる
F3 : Reflection(振り返り)	問題が起こったときにその解決策について考えをめぐらせることができる
	現在みえている問題点から、今後どうすれば解決できるかについて考えることができる
	問題が起こったときに、その原因について考えをめぐらせることができる

モデル適合度	
SRMR (良適合 : < 0.05)	0.020
TLI(良適合 : > 0.95)	0.997
RMSEA (良適合 : < 0.05)	0.012

## WWL事業参加のAARサイクル尺度への影響（H校舎）

- H校舎WWL事業高頻度参加（3回以上）生徒は、一般的参加生徒よりAnticipation（予測）のスコアは高く、有意差あり。（t test  $p < 0.05$ ）
- 他の尺度も、高頻度参加者の方が高い傾向を示した。

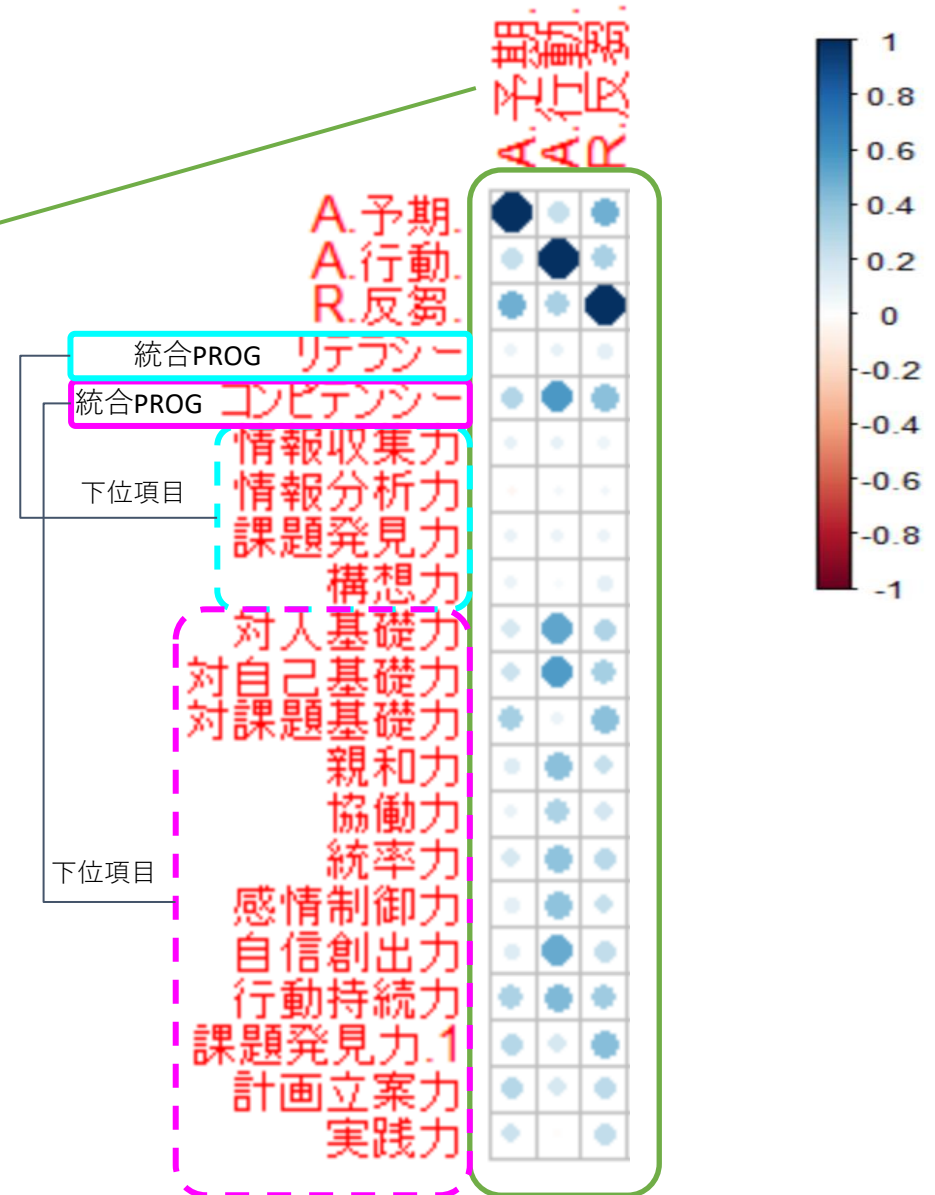


# 相関\_AAR-PROG

① AARの因子はいずれもリテラシーとの相関は弱く、コンピテンシーとの相関が強い。

② A（予期）とR（振り返り）はコンピテンシーの対課題基礎力・行動持続力・課題発見力・計画立案力・実践力と相関が強い

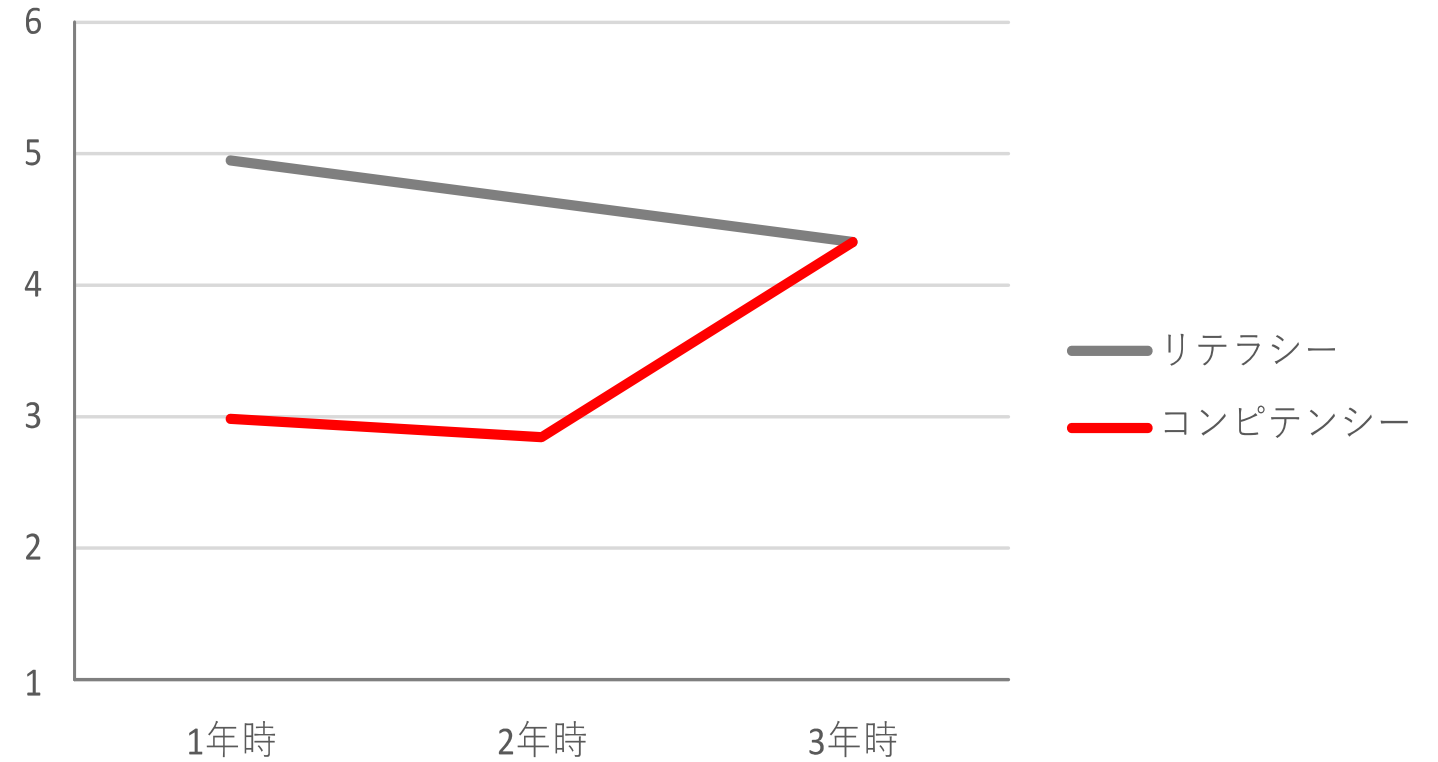
③ A（行動）は対人基礎力、対自己基礎力、親和力、協働力、統率力、感情制御力、自信創出力、行動持続力と相関が強い



## 年時推移: リテラシー・コンピテンシー

- WWL事業参加附属高校生の  
コンピテンシーは3年生で向上  
(PROG調査結果より)

各学年でのスコア推移





## 年時推移:WWL×PROG リテラシー・コンピテンシー

- リテラシー及びコンピテンシーのいずれにおいても、初年度（1年次）にはWWL事業の参加 or 不参加によるスコアの差はない。
- 3年次において差が生じていた。
- コンピテンシー：  
WWL事業参加 or 不参加でスコアに1年次は差がなかったが、2年次から3年次でスコアが上昇
- WWL事業の教育効果を示唆

